開善寺境内遺跡

発掘調査報告書

1974.3

長野県飯田市教育委員会

開善寺境内遺跡

発掘調査報告書

1974.3

長野県飯田市教育委員会

序

飯田，下伊那地区には，先住民族の生存生活による古代遺跡地が多く，特に竜丘地区における古墳や遺跡地は数多く分布し今迄の発掘調査においても貴重な遺物が出土し，古代文化のすばらしさに感慨をおぼえる。

又中央自動車道路事業にともなう通過地の埋蔵文化財包蔵地調査も完了し出土した遺物は多数にのぼり，これ等出土品を保存，学術調査研究等に資するため，飯田市考古資料館を建設するにあたり，その建設地を竜丘上川路開善寺境内に求め事前発掘調査をするに至った。

この遺跡は，開善寺境内遺跡登録3923号地で，土地所有者橋本玄進氏のご理解と，調査団長佐藤甦信氏，調査主任遮那藤麻呂，調査員今村正次，片桐孝男の諸氏の労を謝し，指導に当られた大沢和夫，県指導主事今村善興両氏の方々にもお礼申し上げます。

尚図版や写真のほか出土品の保存に佐藤氏の並々ならぬ御骨折に対し敬意を表し厚く御礼申し上げます。

昭和49年３月

飯田市教育長

矢　亀　勝　俊

目　　次

序　　文

Ⅰ　環　　境 …… 1

Ⅱ　発掘調査経過 …… 3

Ⅲ　調 査 結 果 …… 4

　　1．遺　　構 …… 4

　　2．遺　　物 …… 7

Ⅳ　ま　と　め …… 14

図　　版

あ と が き

開善寺境内遺跡

I 環　　境

遺跡は長野県飯田市上川路に所在し，その中心となるのが開善寺である。上川路は旧村竜丘の南端にあって久米川を境に南は飯田市川路に接し，飯田市街地より南6㎞，国鉄天竜峡駅より北2.3㎞の距離にある。竜丘地区は東は天竜川の花崗岩を刻みこんだ深い渓谷により，天竜川に接するというものの沖積低地は時又の一部と，上川路面の僅かであり，大部分が洪積期の台地からなり，東から西に次第に高まっている段丘地形が発達している。開善寺の北は，すぐ段丘崖となってこの上に舌状に東西にのびる低位の洪積台地となり，この北を流れる臼井川を隔てて塚原古墳群のある塚原台地となり，駒沢川によって切られ，小池，さらに一段高い桐林段丘面となり，高位段丘の臼井原面へと続く。西は開善寺山の緩い傾斜面をなす段丘崖が山となっており，この上は飯田市中村の台地面が展開している。久米川を越えた西側も小高い丘陵が続いて飯田市伊豆木となる。南は天竜川の支流久米川を隔てて，また東は最低位の沖積段丘面となって飯田市川路地区となり，東を天竜川が南流して天竜峡の渓谷の入口に至る2㎞の間は天竜川氾濫原の水害地帯が開けている。

天竜川は竜丘地区に入って深い渓谷となり，時又の南端で渓谷は終わり，さらに天竜峡の渓谷に入っていく。このため，この2㎞の間は常に水害に見舞われ，洪水によって湛えられた土砂の堆積が長期にわたって繰りかえされ，沖積段丘を形成している。開善寺付近では，天竜川と支流久米川の洪水堆積が深さ180㎝におよび，この下層は砂層となり，久米川の旧流路とみられるものである。

遺跡は開善寺周辺の南北200㎞，東西400㎞の平坦面で標高385㎞，伊那谷の第9段丘面にあり，天竜川への距離は約800㎞，その比高差は15㎞を測る。開善寺はこの平坦面の北端にあり，その後には低い段丘崖を背負っている。開善寺鐘楼より東70㎞の山裾に接した400㎡が今次発掘調査地点である。

開善寺境内よりは，表採または耕作中の出土であるが縄文中期，弥生後期，古墳時代から平安時代にいたる遺物が多くみられており，特に奈良時代の古瓦の出土が注目され，また鉄斧，紡錘車の出土もみている。また，周辺をみると遺跡の西端には長野県指定の御猿堂古墳，馬背塚古墳の前方後円墳があり北には臼井川を越えた台地上に塚原古墳群がある。久米川をこえたすぐ西には花御所古墳群，南には正清寺古墳群があり，正清寺古墳は飯伊地方最低位の標高370㎞の天竜川氾濫に面した前方後円墳である。正清寺古墳より一段高い洪積段丘面には縄文前期の今洞遺跡が指呼の間にある。北方の臼井段丘の南裾には駒沢川に面して宮洞，河内洞，小臼井，堤洞の須恵器の桐林古窯址群があり，東の天竜川の対岸の山裾に御殿田古窯址群が望まれる。駒沢川の北に古墳時代の集落址小池があり，さらに一段高い段丘面に前の原遺跡があり，縄文中期，古墳時代の集落址である。前の原面の西端部には飯田地方の最も古い前方後円墳とされる兼清塚があり，この北方の一段高い段丘面に前林廃堂址がある。

開善寺は飯伊地方の禅寺として最も古いものの一つである。鎌倉時代，伊賀良庄地頭北条江馬氏によって開禅寺が大鑑禅師を開山として創建され，北条氏滅亡後，信濃国司小笠原貞守によって開善寺として存置継承され，寺運を高めたものとみられている。(1)

かつては七堂伽藍，東西両班の僧坊をもち，小笠原氏の道場であり，室町幕府によって十刹に列され

図１　遺跡付近地形図及び周辺の関連遺跡

た名刹である。

明応８年（1499）に火災にあい，「七堂悉焼亡唯山門存矣」[2]と，山門一宇を残して七堂すべてが焼失している。永正３年（1506）にも火災にあい[3]，その後小笠原氏の内訌，分裂による勢力の衰退により寺運も衰え，荒廃に傾く事態にいたった。天文10年（1541）武田信玄の援助によって，信玄と親交のあった速伝和尚が住持となり復興にあたり，旧観に復するにいたっている。しかし，天正10年（1582）織田信長の信濃侵入の際に兵火に遭っている[4]。

山門を除き，現在の建造物は江戸時代に再建されたもので，元禄11年境内絵図写しによると現在とほぼ同じ建造物がみられ，さらにかつてあった堂宇跡が印され，その規模の大きさをうかがうことができる。山門は重要文化財，鐘楼は重要美術品に指定されている。

注１　下伊那史第５巻

注２　開善寺常住録

注３　開善寺常住録　永正三年十月十六日　小笠原金吾（信貴）兵を伊賀良庄に挙て火を村邑に放つ。独り当山門のみ依然残存す。

注４　開善寺常住録　天正十年織田氏の軍伊那郡に入り，開善寺に於て兵糧を徴発す。此時山門に屯集する土豪等命を奉ぜず織田の兵怒りて諸堂を焼く。然れども山門のみ事なきを得たり。

II　発掘調査経過

昭和48年度範囲市町村広域事業として，考古資料館が飯田市に建設されることが決定し，これにより市立飯田考古資料館として開善寺境内に建設される運びとなった。この用地はもとより開善寺境内遺跡の一部であり，このため飯田市教育委員会が工事前に用地内400㎡について発掘調査することになったのが，本次調査である。

発掘調査日誌

10月６６日（くもり）　午前中作業。器材運搬，テント張り，グリッド図を作成する。グリッドは２ｍ×２ｍの西から東へａ～ｈ，南から北へ１～14を設定することにした。

10月８日（くもり・晴）　飯田市教育委員長橋本玄進氏の挨拶があり，作業にかかる。グリッド設定ｇ・ｅ列グリッド調査にかかる。表土下全面に堅い面があり，中世陶器片の出土をみる。

10月９日（晴）　ｇ列グリッドに配列石を検出，金環の出土をみる。中世建造物跡とみるもので，開善寺古図によると梅宅軒跡とある位置に一致する。ｅ３グリッドを掘り下げ調査，深さ90㎝の黒褐色土層に土師器，須恵器，灰釉陶器片の出土をみ，これより下に遺物はなくなり，深さ180㎝で白い砂層となり，久米川の古い堆積とみられる。

10月10日（晴）　調査休み。午前中ブルトーザーで全面の表土排除を行なう。

10月11日（晴）　ブルトーザー排土跡の整理，全面に炭灰を含む面が拡がる。ｆ・ｇ５～８グリッドに方形となる配石遺構Ｉを検出，配列石の調査をなす。

10月12日（くもり）　全面の排土作業，配石遺構II，柱穴列を検出する。配石遺構Ｉ，配列石の実測にかかる。

10月13日（雨となり，午前中で作業打切る）　配石遺構IIの検出作業。

10月14日（くもり・晴）　配石遺構IIの調査，配石遺構Ｉの上部の石を除き調査。ジャリ詰ピットを検出，東半分を切り調査。中世陶片，布目瓦の出土をみる。ａ７グリッドに炭化米の多くと洪武通宝１を検出する。

10月15日　休み

10月16日（晴）　全面の清掃，写真撮影，柱穴群の検出調査，ｇ10～12グリッドの落ちこみ部の調査土師器，須恵器片の多くの出土をみるが遺構検出できず。

10月17日（雨）　休み

10月18日（晴）　ｇ10～12グリッドの落ちこみ部は自然地形による傾斜をなし，遺構とは認められないものであった。配石遺構Ｉの上部の石を除き調査，長方形に内部に面を向ける配石となるが，性格は

不明。柱穴群の調査。内部に木炭を多く含み，中世陶片，常滑甕片の多くが入る柱穴もみられる。

10月19日　休み

10月20日（晴）　全体測量，配石遺構Ｉ下部の実測。ジャリ詰ピットの西半分の調査，内部よりの陶器片多し。

10月21日（晴）　配石遺構Ｉの最下部の調査。２この方形石囲いとなる。実測，写真撮影。テントを撤収，現場での調査を終了する。

その後工事中，排水溝作業中土師器の多くの出土をみる。

遺物，図の整理をなし，報告書の作成にかかる。

Ⅲ　調　査　結　果

Ｉ．遺　構（図２・３）

発掘調査によって発見された遺構は，配列石，配石遺構，集礫群，柱穴群，礫詰土坑等がある。これら遺構の位置は開善寺古図（図13）によれば梅宅軒跡にあたる。しかし，遺構からみて，その建造物跡を正確に把握できる状態ではなく，また，何回かの建替が行なわれたことが看取された。

(1)　配列石（図２）

用地の東端に南北方向に並ぶ配石で図２の断面Ａ－Ｂ，Ｃ－Ｄの列石である。人頭大から一抱え大の石をＡ－Ｂは西に，Ｃ－Ｄは東に面を向けているが，Ａ－Ｂは間の石がはずされており，北側も失っている。またＣ－Ｄは北側の一部を残すのみとなっているが，雨落溝とみられるもので，建造物の東端をなすと考えられる。

(2)　配石遺構

ア，配石遺構Ｉ（図２・４・５）

配列石の西側に接し，上部（図２）は5.80ｍ×2.30ｍの長方形に人頭大から一抱大の石を不規則に並べたものであり，外周をなす石の配列からみると内側に面を向けるものとみられる。上部の浮石を除くと図４のように北側は2.7ｍ×2.2ｍの方形に，石の面は内側に向く石囲いをなし，南側は上部とほぼ同じ不規則な配石をなす。さらにこの下部は4.8ｍ×2.2ｍの長方形の内側に面を向ける石囲い（図５）となり，中央より南に寄って東西方向の列石により，南北二つに区切られる石囲となっている。北側の石囲いの中央に浅い掘り凹みがあり，内部に炭・灰を僅かに検出している。これが石囲いと関連するか，時間的差のあるかは不明である。石囲いの形態からみると「いろり」とみられるが，それを断定するにはいたらなかった。

イ，配石遺構II（図２）

用地の西端部に発見された土台石の配石の一部とみられ，配石Ｉと同方向をさしているが，配石の列は原形をとどめていない。北２ｍ～４ｍの間に炭化米と洪武通宝１この出土をみている。

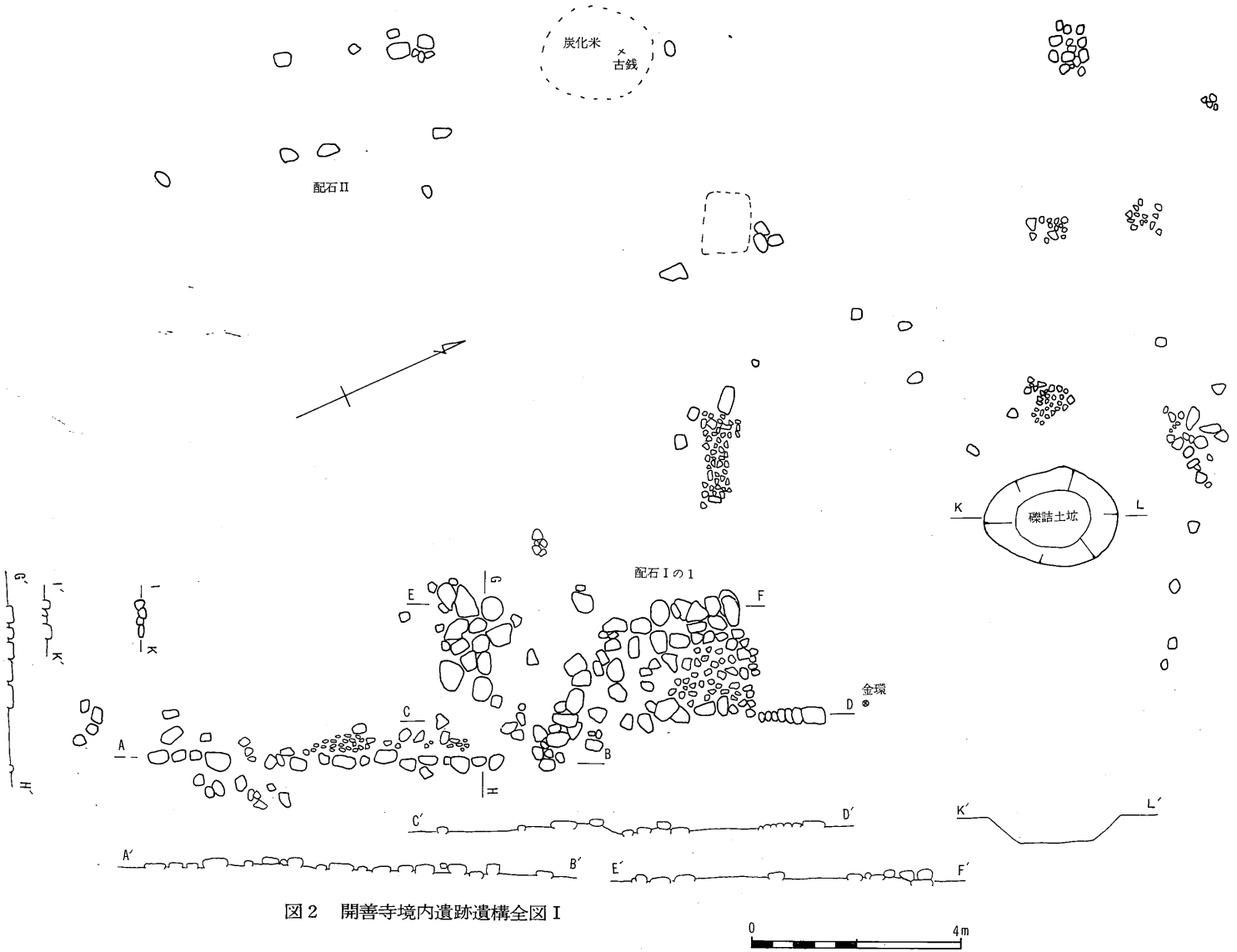


図２　開善寺境内遺跡遺構全図Ⅰ

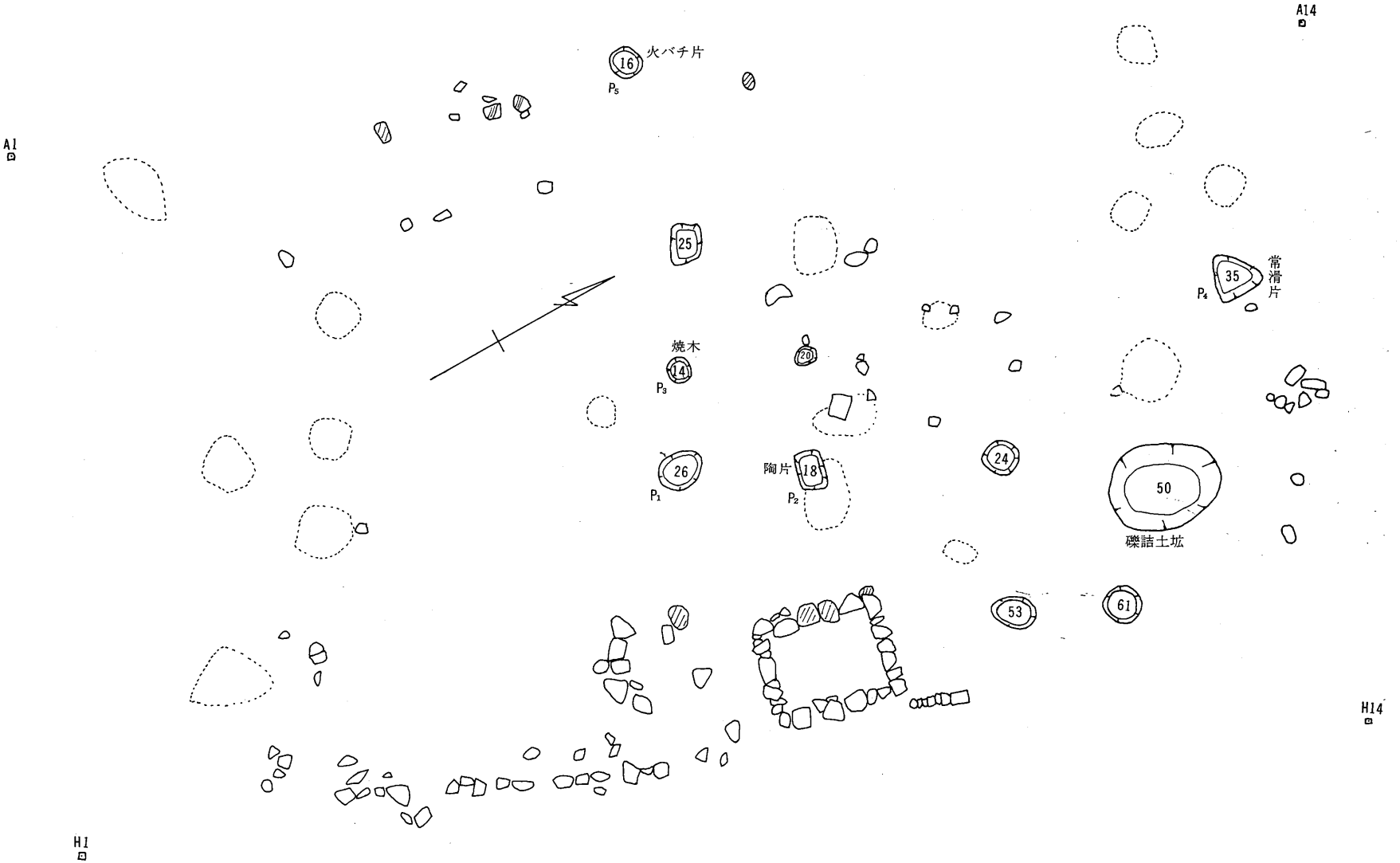


図３　開善寺境内遺跡遺構全図II

0　6m

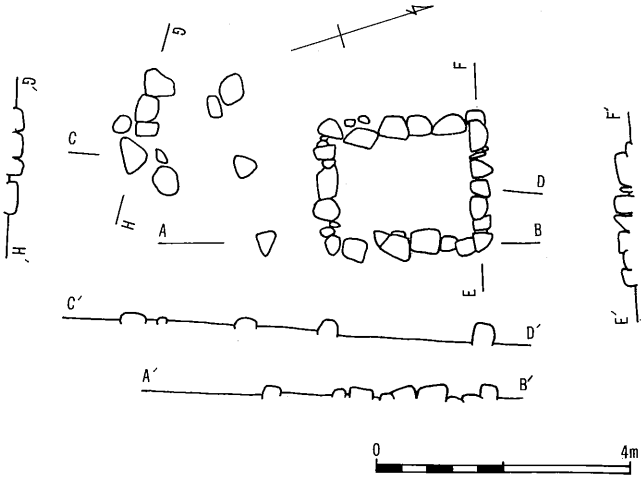


図４　開善寺境内配石遺構Ｉの２

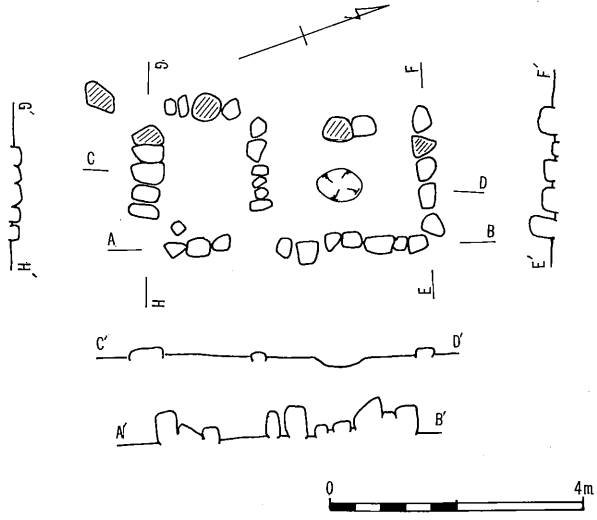


図５　開善寺境内配石遺構Ｉの３

(3)　集礫群（図２・３）

径．または一辺が100㎝内外の円，または方形に礫詰めされたもので，おそらく土台石を固定するための地突跡とみられる。その跡は何個所にも見られるが，建造物跡を確かめるには不十分な残存状態であった。

(4)　柱穴群（図３）

調査区域のほぼ中央部から北側に列をおとす柱列がみられるが，建造物の規模を知ることのできるものではない。柱穴は径50～80㎝大で，形は円形と方形があり，内部には多量の木炭を含み，Ｐ３は焼木が，Ｐ２・Ｐ４には常滑甕片が周囲に詰められた状態で出土をみ，Ｐ５を除き掘立柱穴とみられるもので，明らかに火災跡と認められるものである。Ｐ５は内部に火鉢の大きな破片が埋められており，柱穴とはみられない。その東側は炭化米が検出された所である。

(5)　礫詰土坑（図２）

用地の北側，段丘崖の裾部近くに発見され，南北254㎝，東西190㎝，深さ50㎝，楕円形をなし，内部にぎっしりとジャリを詰めこんだものである。このジャリの中に布目瓦片，中世瓦片，中世陶器片が検出されている。礫詰土坑としたが，その性格を十分に把握することはできなかった。

２．遺　　物

(1)　開善寺に関連する遺物（図６～９）

古常滑（図６）の破片は多くみられ，図６の１～６は古常滑の終末期，織田信長の常滑窯に対する禁窯令のでる直前のダブガ脇様式の典型的なものである。室町時代後葉に比定されるこの段階では，口縁部の折りかえし部分が肥厚して接着してしまっているものである。１・２は壺形，３～６は甕である。７の短頸壺は常滑第一様式から第二様式への過渡期の鎌倉時代初期のものである。[1] ８は底部，９～11の押印はいずれも格子目で，各時代にみられるもので編年の基準にはならない。常滑甕片の大部分は柱穴の根石の代用として用いられたものであることが注目される。

すり鉢（図７）の破片の出土は多く，これらの中に時代の古いとみるものに１・２がある。内面底部に刻み目をもたぬ鎌倉時代に比定できる古い様式をもつ。３～８は室町時代後半とみるものである。いずれも鉄泥を塗った程度の無釉で淡灰黒色を呈す。１・２は荒い糸切り底，無整形または篦削りの底部縁をなすのに対し，６～８は細かい糸切り底の洗練された底部縁をなしている。

良質な陶磁片（図８）の出土も多い。青磁には１・２の他に小破片数点があり，いずれも良質な舶載品であり，２は竜泉窯の輪花碗である。３は平安期の灰釉陶器で東濃系，直接開善寺に関連するかは不明。

天目茶碗，碗，壺，皿等の破片は多く，火災による釉の変化のみられる図８の９～10，13～16があり釉がとけ，剝げてしまったものも見受けられる。４～７は天目茶碗，４は口縁部にくびれをもつ古いタイプ。高台部はみられず，その時期は決定されないが，５～７は室町時代後半とみられる。壺には９・10があり，９は一見須恵器とみられるが胎土は瀬戸周辺とみる陶器で，釉は二次変化により変色し灰黒色を呈し，内面は赤色を呈す。長頸壺とみられる。10は頸部のみでその器形は不明である。緑色の灰釉で釉の剝落が多い。小皿には12～15があり，12は炭化米と伴出し，13は石列より出土，ともに緑色の灰釉が口縁部のみにたっぷりかかり，他は無釉となる。13は糸切り底，14・15・16は高台をもち，ともに火災による変化を受け，淡緑色の釉の剝落がめだつ。　16は内面に菊花印をもつ。17は小形仏花瓶の台部，淡緑色の灰釉がかかる。18は素焼の小碗，胎土は精選されている。

オロシ皿（図６の18～20）　18・20は大きい。19は細かいオロシ目をもち，ともに糸切り底。20は白ぽい胎土で焼成のあまり良くないものである。

火鉢（図７の９）　炭化米出土のすぐ南側のピットに埋められた状態で出土。鼎状をなす脚をもち，口径25.5㎝，高さ23.5㎝，両側に持ち穴が付き，この側面に丸と菱形の飾窓がつく。赤褐色を呈し，口縁部は横の刷毛目，他は篦磨きとなり，内面は粗雑な整形で，刷毛目が施され，胎土は砂質粘土のざらざらした面がみられる。

瓦（図９の１～４）　１～３は奈良時代の布目瓦である。この期の布目瓦は開善寺境内西側の桑畑より多くの出土をみており，ここに古い寺院址の存在が想定されている[(2)]。今迄に開善寺境内東側よりの古瓦の出土例はないとされていたが，今次調査によって初めて発見されたものであり，いずれも灰色系の平瓦片である。４の丸瓦は灰黒色を呈し，裏面には布目痕をもつ。鎌倉時代とみるもので，開善寺創立期のものと考えたい。

硯（図６の16・17）　同一個体のものとみられ，粘板岩製，材質の目に対して直角な掘りこみをもつ良質なものである。赤色を呈するが，破片断面は黒ぽく，おそらく火災による変化を受けたものとみられる。

茶臼片（図６の14・15）　いずれも茶臼下臼の縁の破片，14は砂岩製で内面には漆がぬられている。15は安山岩製である。

古銭（図６の12・13）　12は炭化米と伴出した洪武通宝（明太宗1368年）である。13は文字の判読ができない。

炭化米（図版Ⅱ）　調査区域の西端部に約２ｍ×1.8ｍのほぼ楕円形の範囲に塊状となって出土をみたものである。

(2)　古墳時代の遺物（図10）

土師器・須恵器・埴輪・金環・鉄鏃等の出土をみており，これらの多くは調査区域の東端部よりである（図10の１～16）。１・２は円筒埴輪片で，１は焼成の極めて堅く内外面とも刷毛目整形がていねい

に施されている。２は口縁部が開くもので，やや荒い作りであり，１・２ともに内面に接着部の指圧痕をもつ。土師器には３の碗形土器，４～６の高坏形土器があり，３・４は内面黒色であり，鬼高Ⅱ式とみる土器である。須恵器には７～11があり，瑳の破片とみられる。９・10は櫛描きの波状文，11は箆がき文をもつ。いずれも胎土・焼成の良い第三様式に比定されるものである。12の金環は径1.9㎝の小形のものであり，外側は剝落しているが内側には全面に金が残っている。14は粘板岩製の紡錘車片である。鉄鏃15・16は尖根鏃の鋒部を欠くものである。

13は径2.8㎝，厚さ1.5㎜内外の円形銅板であるが，時代的にも，また何であるかについても明らかでない。

以上の遺物からみると，かつては後期の古墳があり，開善寺創建期に崩され，ここに建造物がたてられたものとも推定される。

17～19は用地外の南西側の排水工事の際に出土をみた土師器である。17は長胴甕，18は坩で頸部を欠く。19は壺形とみられる。頸部に連続円文が施されている。18・19は鬼高Ⅰ式，17は鬼高Ⅱ式に比定されるもので，いずれも胎土，焼成の精良なものである。

(3) 平安時代の遺物（図11）

須恵器に２の坏があり，糸切り底，胎土，焼成の良くない竜丘地方産のものである。土師器には３の高坏形土器，７・８の甕形片があり，国分式のものである。４～６の皿形土器はともに胎土・焼成精良なもので，糸切底，４は内面にも削りとった整形痕をもつ。これらは土師器というより素焼土器とみられるもので，時代的にはやや下るものと考えられる。

１は瓦器とみるもので，内外面とも黒色，胎土は精良で，精巧な仕上げで重量は軽い。飯田地方での出土例は稀なものである。

(4) その他の遺物（図12）

開善寺境内よりは縄文時代中期から弥生時代の遺物の表面採集も多く見られている。今次調査で検出されたものに，縄文中期では，図12の４の加曽利Ｅ式土器片１と，この期とみる５・６の打石斧がある。弥生時代の石器に１・２の石鏃と，３の有肩扇状形石器の出土をみている。

注１　杉崎章　「常滑窯業の歴史」　昭49.3。及び杉崎先生の教示による。

注２　市村咸人　下伊那史第四巻　下伊那誌編纂会　昭和36年

Ⅳ　ま　と　め

1．調査区域は飯田市考古資料館建設用地の400㎡の小範囲であったが，ここには開善寺古図による梅宅軒跡となっている位置であることがわかった。遺構には配石址，柱穴列等が発見されたが，その建造物を知るには不十分な状態のものであった。

梅宅軒は開善寺における七堂伽藍の一堂宇である。開善寺創建は鎌倉時代末，伊賀良庄地頭北条江馬氏によるものとされるが，遺物よりみると鎌倉期の丸瓦，古常滑の第一様式から第二様式への過渡期とみる短頸壺があり，建造物についての遺構は，僅かに残存する礎石からと，配石遺構上部に積まれた石は，明らかに土台石となっていたとみるものを集め，火災後の堂宇施設に使用したと考えられ，初期梅宅軒の堂宇は整えられた建築であり，小笠原氏による室町初期の整備された開善寺の盛時を知る手掛りといえよう。

1499年の火災後の再建については明らかな確証をもてないが，1506年の火災による再建については，1641年武田晴信の援助によって，速伝和尚による復興がなされたことは開善寺記録によって明らかであるが，調査結果によれば掘立柱の堂宇建造がなされたものとみられる。織田信長の伊那侵入によって山門一宇を残し焼払われた痕跡は全面に拡がる木炭と部分的にみられる焼土，炭化米の出土，柱穴に残る柱の焼けた炭にみられる。柱穴に根石代用に詰められた常滑甕片は，信長の常滑禁窯令直前のダプが脇様式の典型的なものであり，その建造時期を知る手掛りであり，信長による焼払を実証するものと受けとめたい。

織田信長の焼払後の開善寺堂宇は小規模のものとなり，現在の建造物の多くは山門を除き江戸中期までに建てられたものである。古図による梅宅軒跡は畑となり，太平洋戦時中水田となったこともあり，平坦に整地がなされ，このため十分な遺構を残さなかったものである。

2．調査区域の南東隅には，金環，埴輪片，土師器の出土がみられ，この周辺に古墳が存在したとも考えられ，堂宇建造の際崩されたものとみられる。奈良時代の布目瓦片の出土は僅かであるが，今までは現開善寺西方にのみ出土されるといわれたものであり，奈良時代の寺院の存在が開善寺東側にあったものと予想され，平安期の遺物も多く発見され，すでに，この地に鎌倉末から室町初期に開善寺が建立される基盤があったものと受けとめられる。

おわりに，本次調査にあたって調査主任遮那藤麻呂氏の力はあずかって大きく，開善寺ご住職橋本玄進先生，顧問大沢和夫先生，県文化課今村善興指導主事の適切なるご指導，助言があり，調査員をはじめ作業にあたられた地域の方々に深く謝意を表したい。

本報告書の作成にあたっては，調査主任遮那の所見をもとに佐藤が執筆，編集したもので，遺構実測は遮那，佐藤。遺物の実測・作図・写真は佐藤があたった。遺構図のうちピット内の数字は，その深さをcmであらわしてある。また，遺物は飯田考古資料館に保管している。

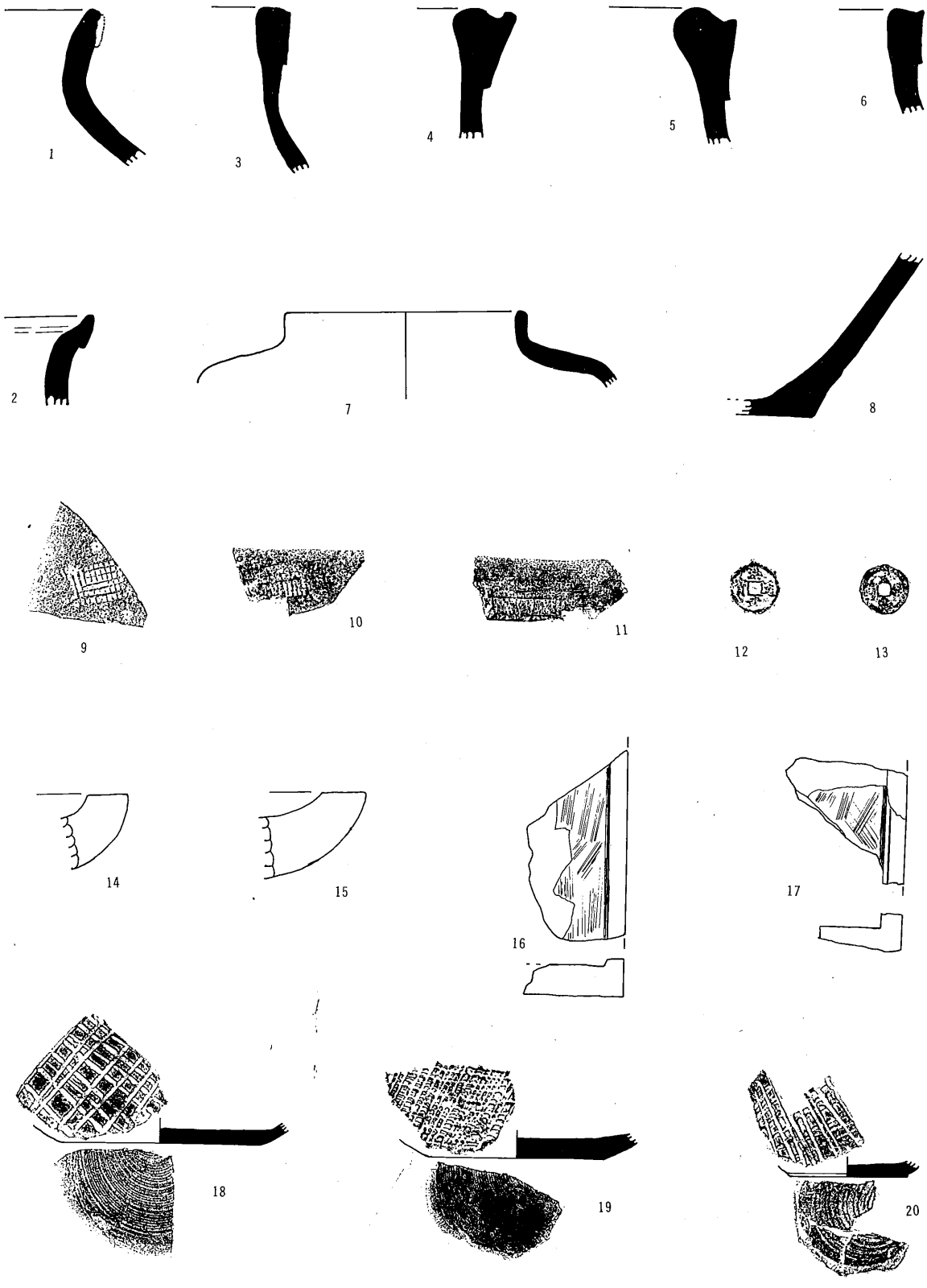


図６　開善寺境内遺跡出土中世遺物Ⅰ（１：３）

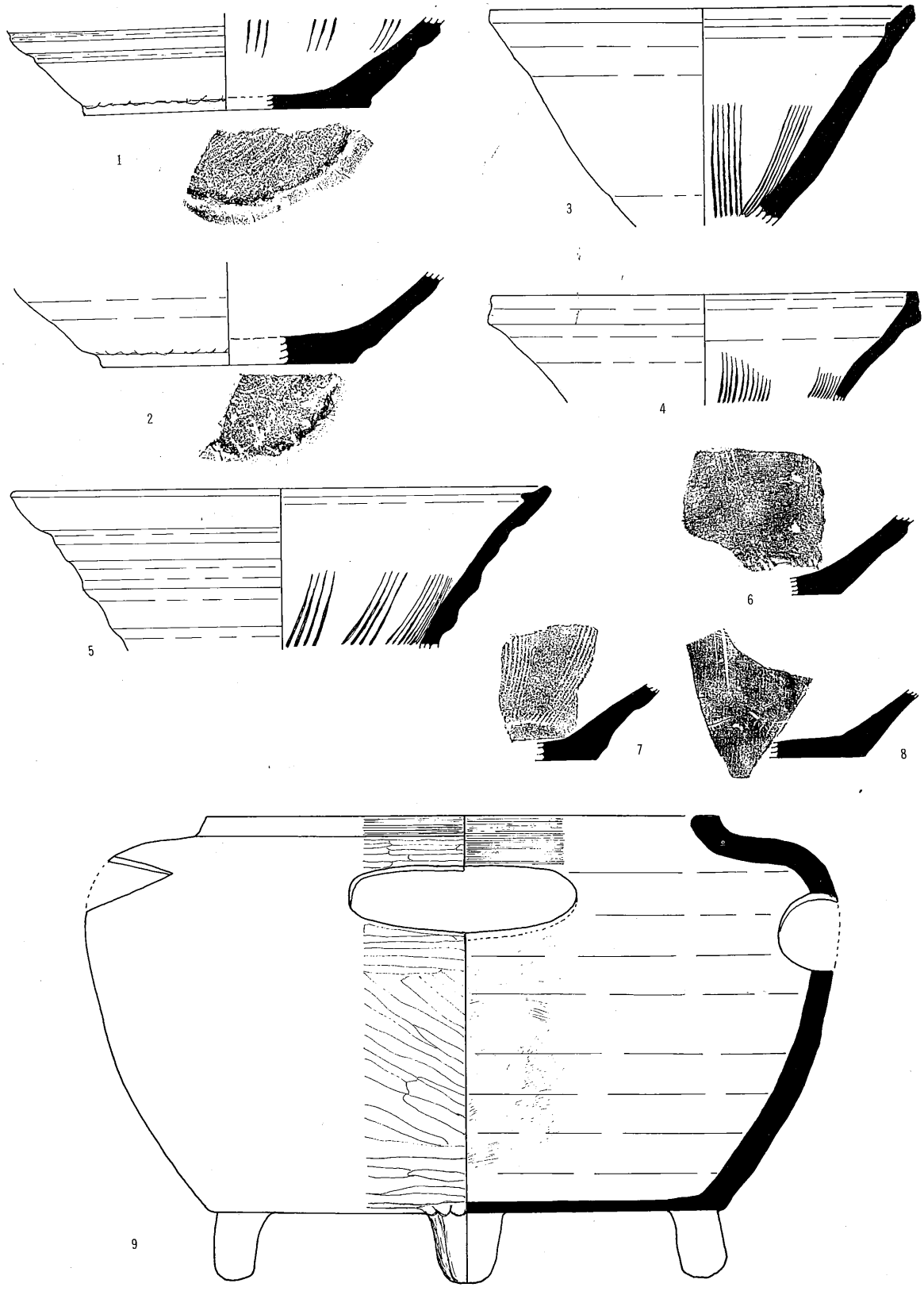


図７　開善寺境内遺跡出土中世遺物II（１：３）

図８　開善寺境内遺跡出土中世遺物Ⅲ（１：３）

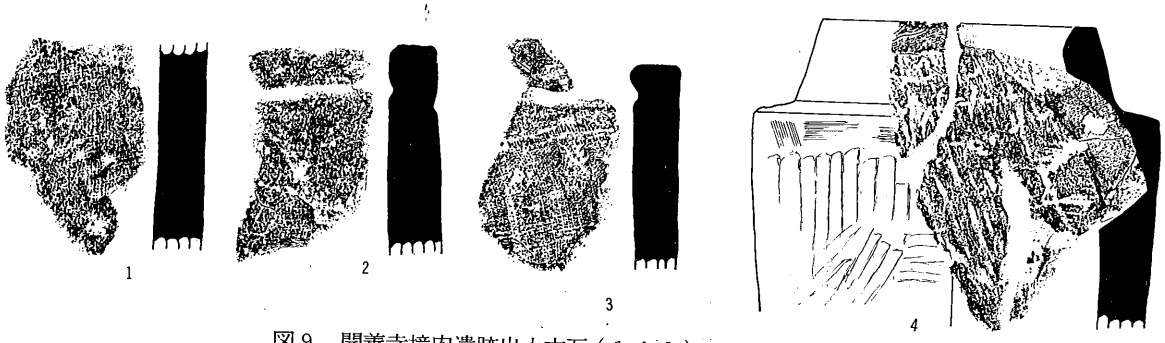


図９　開善寺境内遺跡出土古瓦（１：３）

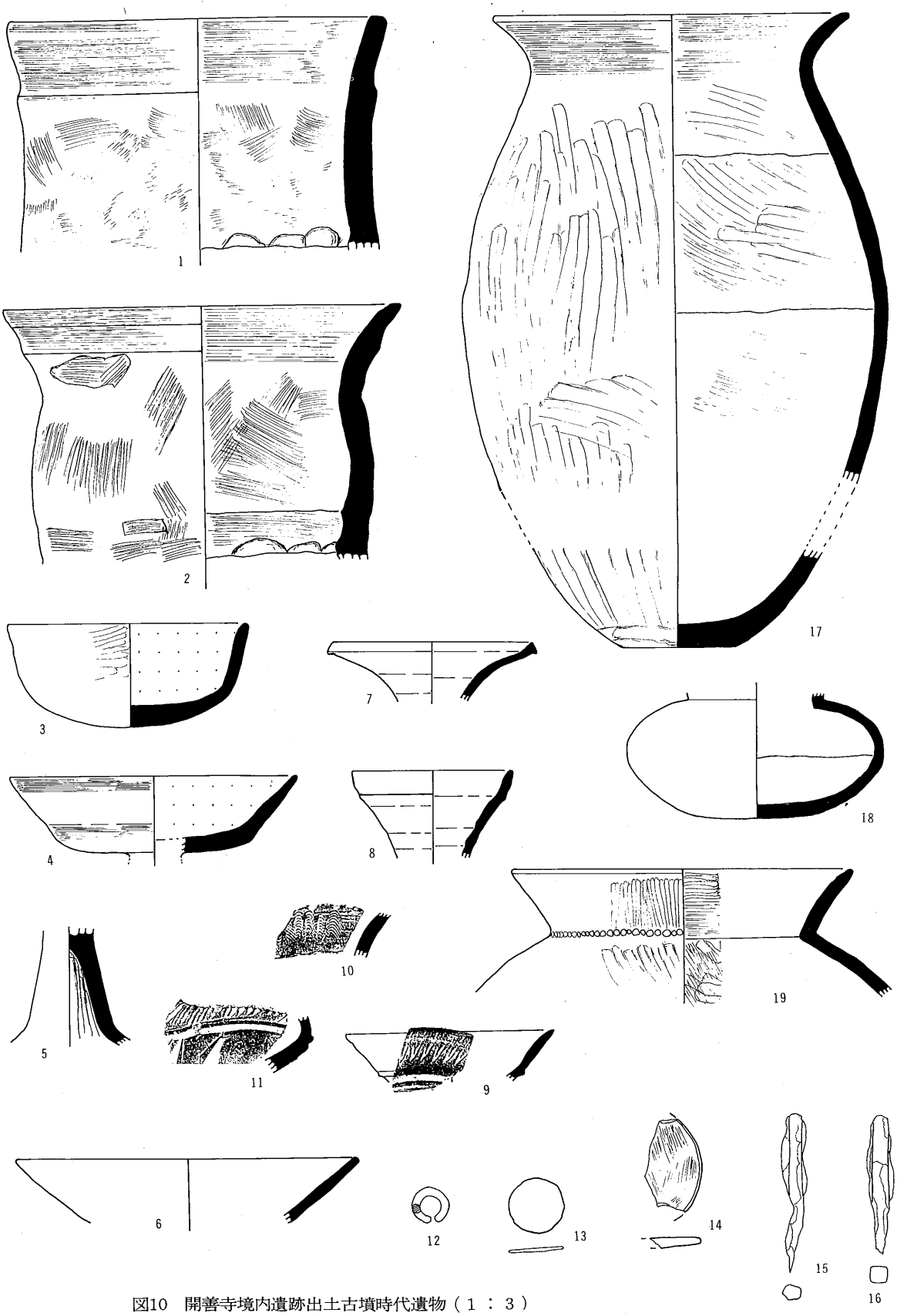


図10　開善寺境内遺跡出土古墳時代遺物（１：３）

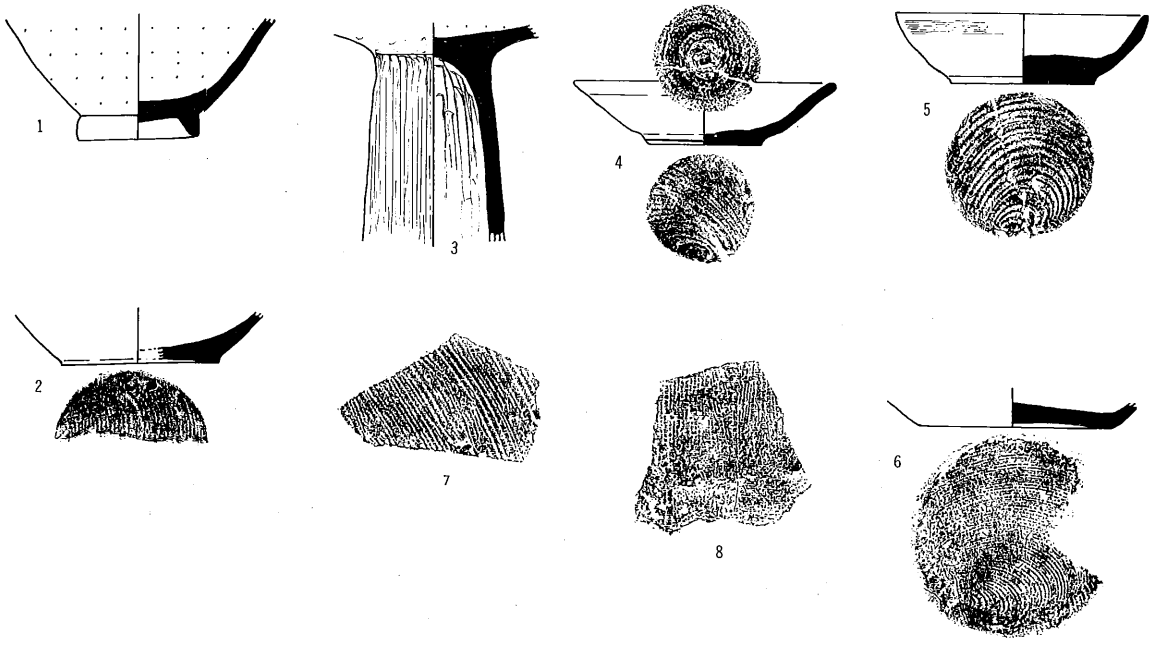


図11　開善寺境内遺跡出土平安時代遺物（１：３）

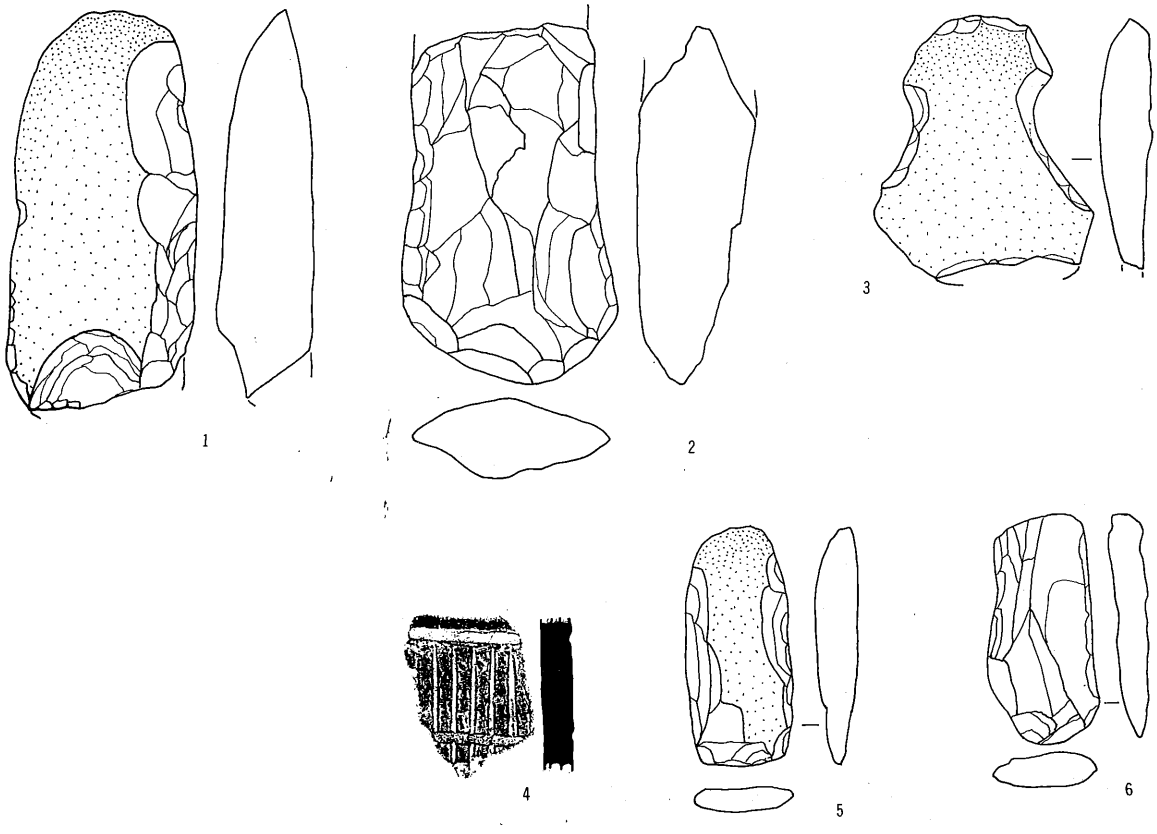


図12　開善寺境内遺跡出土縄文・弥生時代遺物（１：３）

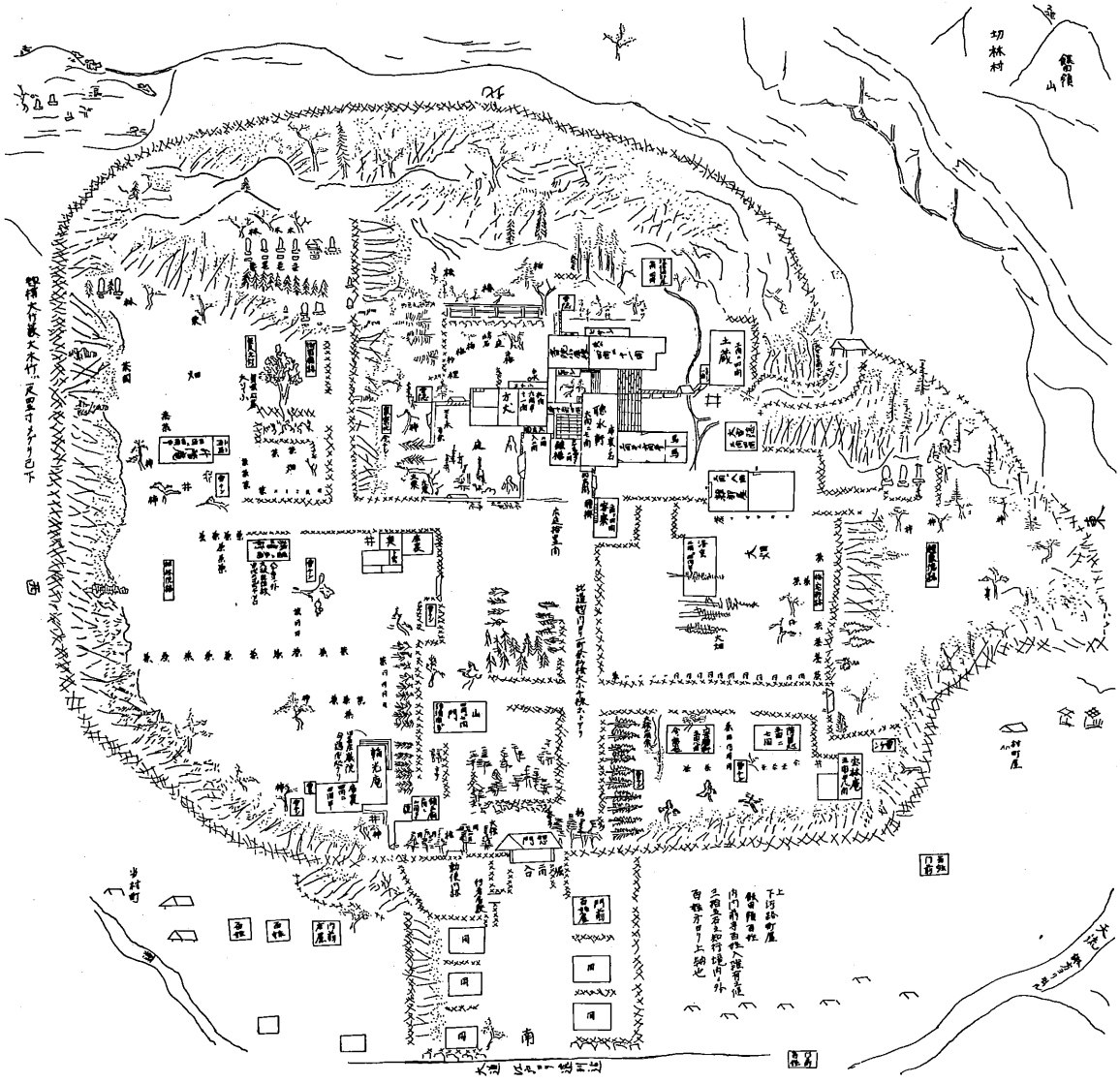
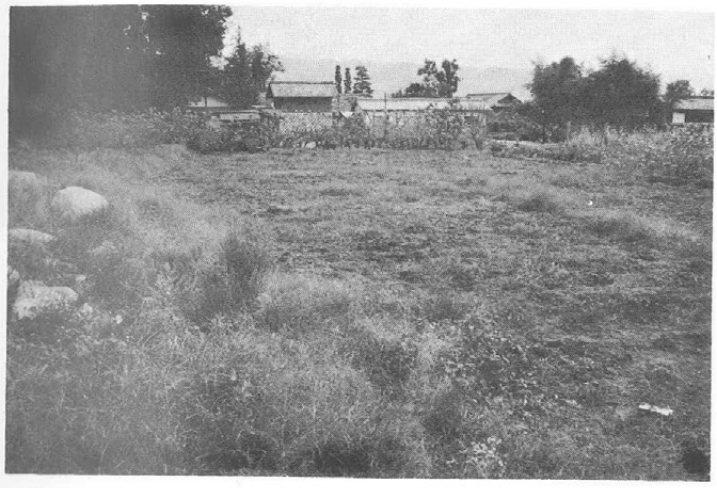


図13 開 善 寺 古 図

I　全　　景

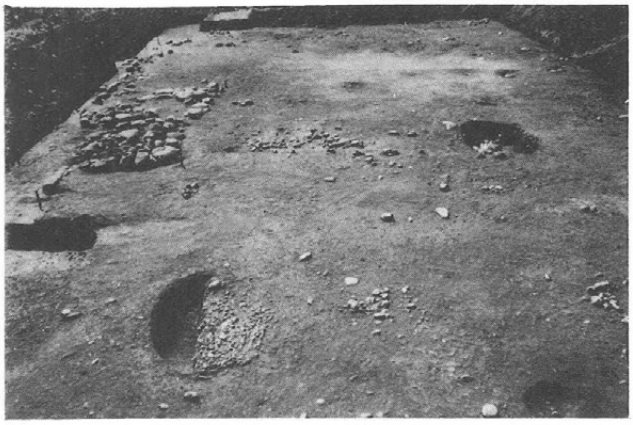
遺跡全景　－ 東から －



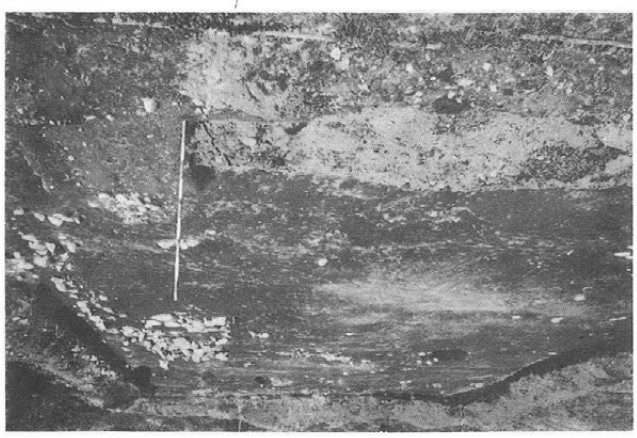
遺跡全景　－ 西から －

考古資料館建築中の遺跡

II　遺構と遺物の出土



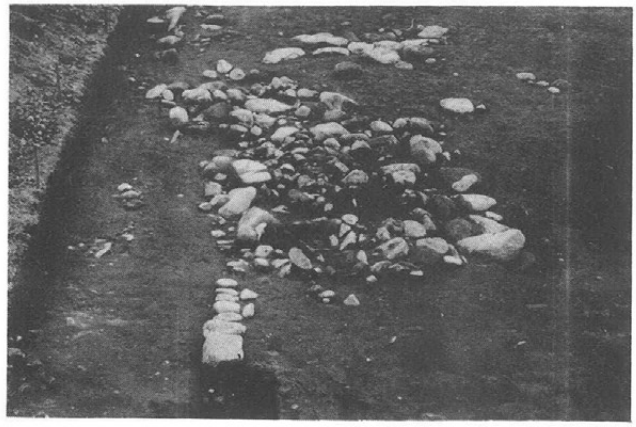
上部遺構全景　北から



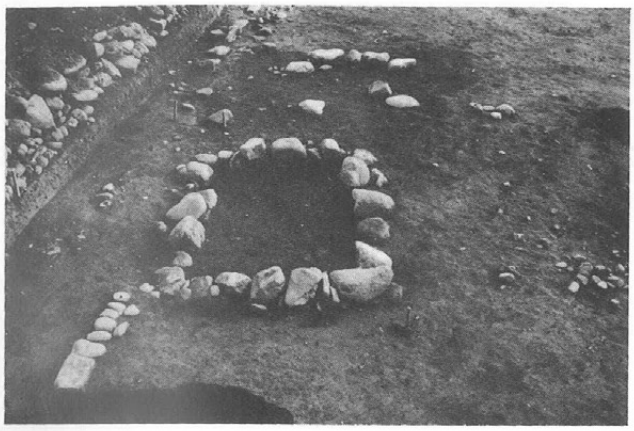
上部遺構全景　南から

下部遺構全景　北から

下部遺構全景　南から

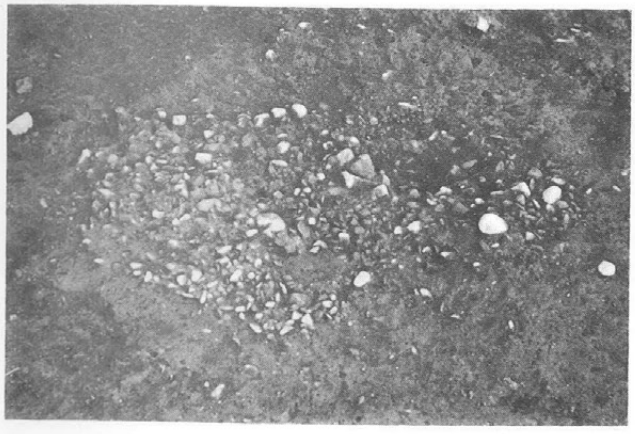


配石址Ｉの１

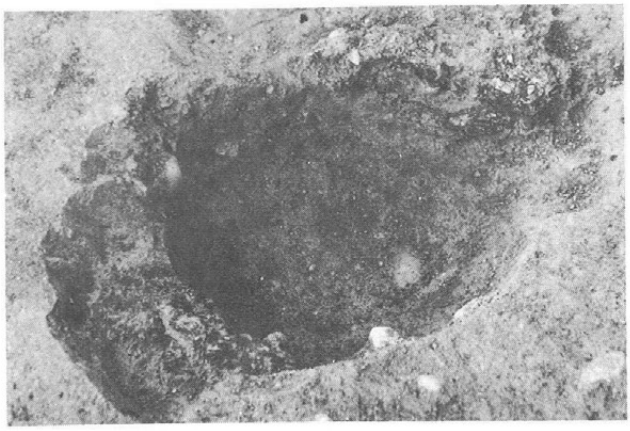


配石址Ｉの２

配石址Ｉの３

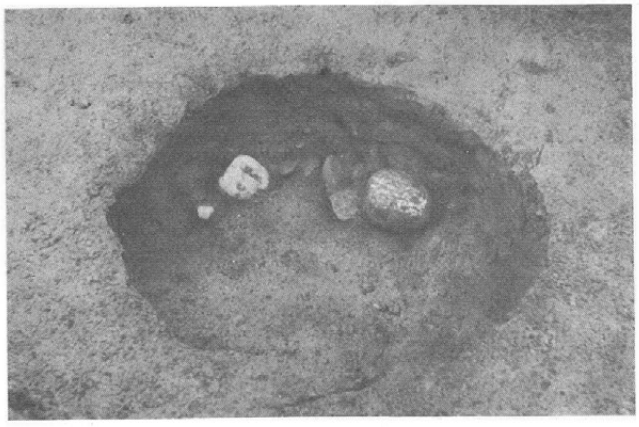


礫詰遺構の上部



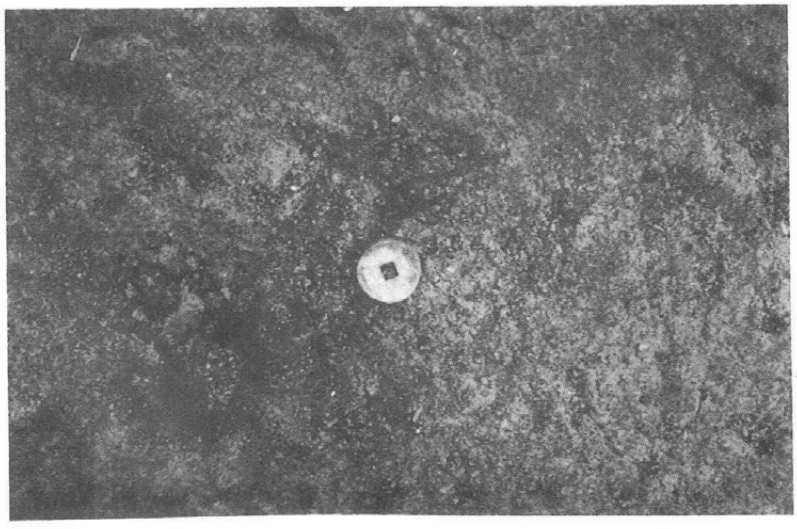
柱穴内の炭化物

柱穴内の炭化物



常滑片の詰められた柱穴

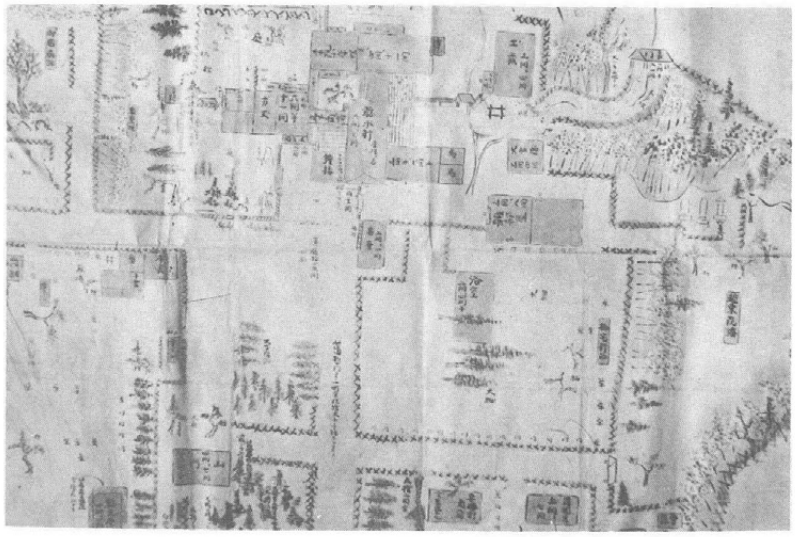
金環の出土



炭化米と古銭出土

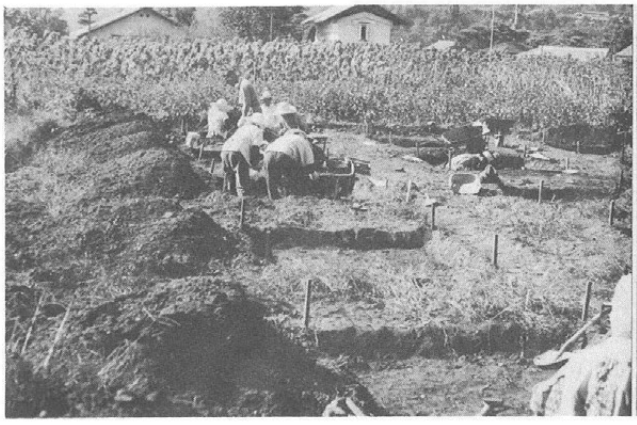
III 開善寺古図

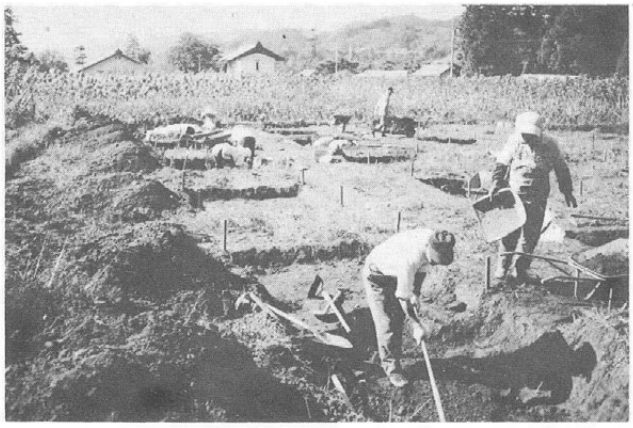
古図全景

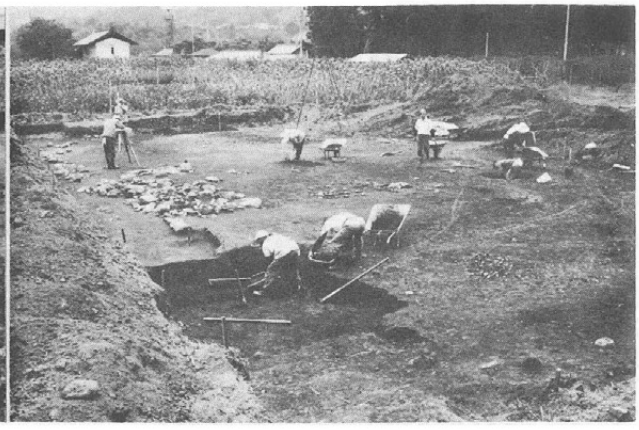


古図　本堂，梅宅軒跡

Ⅳ　発掘スナップ







お　わ　り　に

飯田市考古資料館の建設は県費補助金をうけて飯田市が事業主体となって昭和48年度中に完成する計画であった。

建設予定地も２，３ヵ所上ったが，最終的に歴史的にも意義の深い開善寺境内に土地所有者橋本玄進氏の承諾を得て建設する運びとなった。

たまたま該当地が開善寺境内遺跡として登録地であったので，着工前に発掘調査をして記録保存することとし，飯田市教育委員会の主管事業とし事業費は全額市費で対象面積500㎡を実施した。

調査用地内には開善寺の梅林，川路老人クラブの苗木圃場などあり，移植する時期も悪いときであったが，関係者の深い理解のもとに調査活動が支障なく進められ，調査団長佐藤甦信，主任遮那藤麻呂，調査員今村正次，片桐孝男各氏の終始献身的な尽力と大沢和夫，今村善興両氏の指導助言により調査を完了することができたことに対し深く敬意を表すると共に，中央自動車道通過予定地を主体として各所で行った埋文調査の結果発掘された膨大な出土品を，展示，収蔵，学術研究する場所としての資料館建設地が，遺跡であったことに何かこの調査の意義を感ずるものである。

昭和49年３月

飯田市教育委員会

社　会　教　育　課

開善寺境内遺跡

発掘調査報告書

1974.3

長野県飯田市教育委員会

印刷　飯田市通り町1（株）秀文社